

「これで^{あんしん}安心して^{かえ}帰れるね。」

と、ケンが^{うれ}嬉しそうに^い言いました。マヤも、^{うれ}嬉しそうです。

「あっ、^{かた}固まってしまった^{なかま}仲間たちを^{はや}早く^{もと}元の^{すがた}姿に^{もと}戻さなきゃ。でも、どうやったら^{もと}元の^{すがた}姿に^{もと}戻すことができるのかしら・・・。」

ケンとマヤは、^{こま}困ってしまいました。

「大丈夫^{だいじょうぶ}ですよ。」

エルムが、ニコニコして^い言いました。

「昔^{むかし}から^{つた}伝わる^{しょもつ}書物の中に、^{なか}元の^{もと}姿に^{すがた}戻す方法も^{もど}書いてありました。あなたたちが^{いま}今持^もっているその【^{ゆうじょう}友情の^{はな}花】を^{こんちゅう}昆虫たちに^む向けるのです。ただし、その時^{ときかなら}必ず^{ふたり}二人一^{いっしょ}緒に^て手に^も持ち、^{もと}元の^{すがた}姿に^{もと}戻るように^き気持ちを^こ込めて^む向けなければなりません。大丈夫^{だいじょうぶ}、お二人^{ふたり}なら^{こんちゅう}きっと^{もと}昆虫たちを^{すがた}元の^{もと}姿に^{もと}戻すことができるはずですよ。」

ケンとマヤは【^{ゆうじょう}友情の^{はな}花】を^て手にすると、しばらく^{なに}何も^い言わず^{はな}花を^み見つめていました。そして、二人^{ふたり}同時^{どうじ}に^{かお}顔を見^み合わせ、うなずくと、【^{ゆうじょう}友情の^{はな}花】を^{こんちゅう}昆虫たちに^む向けたのです。すると、【^{ゆうじょう}友情の^{はな}花】から^{ひかり}キラキラと^{はな}光が^{かた}放たれ、^{こんちゅう}固まっていた^{うご}昆虫たちが^だ動き出したのです。^{こんちゅう}昆虫たちが^{もと}元の^{すがた}姿に^{もと}戻ると、^{ひかり}光は^{よわ}だんだん弱^きくなり、消えてしまいました。光^{ひかり}が消え、^{こんちゅう}昆虫たちが^{もと}元の^{すがた}姿に^{もと}戻ると、^{もり}森はそれまでよりも、もっと^い生き^い生きとして^み見えました。そして、いつの間にか^{からだ}固まっていた^{はんぶん}ケンの^{もと}体の^{もと}半分も^{もと}元^{もと}に戻っています。

「ありがとう。ケン。マヤ。」

^{こんちゅう}昆虫たちは、^{うれ}嬉しそうに^と跳び^{まわ}回っています。

「よかった。みんなが^{もと}元の^{すがた}姿に^{もと}戻って。これで、もうこの^{もり}森も^{あんしん}安心だね。」

ケンがマヤに^い言いました。

「私^{わたし}たちも、自分^{じぶん}たちの^{せかい}世界に^{かえ}帰りたいわ。でもどうやったら、^{かえ}帰れるのかしら・・・。」

マヤが、^{こま}困ったように^いケンに^い言うと

「大丈夫^{だいじょうぶ}。僕^{ぼく}に^{まか}任せて。」

エルムが^{じしんまんまん}自信満々に^{こた}答えました。

「だって、僕^{ぼく}が^{きみ}君たちを^{としょかん}図書館からこの^{もり}森へ^つ連れてきたんじゃないか。だから、僕^{ぼく}に^{まか}任せ



てくれれば大丈夫だよ。」

ケンとマヤも嬉しくなり、昆虫たちと一緒にって跳びはねました。もうすぐケンとマヤも元の世界に戻ることができるのです。

「じゃあ、早速連れて行くよ。僕についてきて。」

エルムの声にケンとマヤ、そして昆虫たちも跳びはねるのをやめました。

「僕たち、元の世界へ帰るけど、この森でのできごとは、忘れないよ。みんなこれから、仲良く楽しく過ごしてね。」

ケンがそう言うと、昆虫たちは、少し寂しそうでしたが、二人を森の出口まで見送ってくれました。そして、森の出口まで来ると、

「ケン、マヤ、ここでお別れだよ。本当にありがとう。君たちのおかげで森に平和が戻ったよ。僕たちも君たちのことを絶対に忘れないよ。」

昆虫たちは、最後の言葉をかけてくれました。

そして、ケンとマヤ、エルムだけになると、

「さあ、来た時と同じように僕の背中に乗って。」

エルムが声をかけます。二人がエルムの背中に飛びのると、エルムはぐんぐん空へとあがっていきます。そして、

「君たちがいた図書館を思い出すんだ。」

と言ったのです。二人は、エルムの背中に乗りながら、図書館のことを一所懸命思い出しました。すると、真っ暗な世界にどんどん吸い込まれていったのです。そして・・・

「あれ？わたしたち、この図鑑を見ながらねちゃったのかしら。」

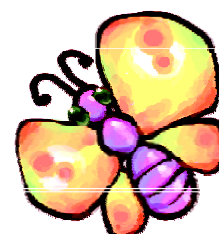
二人は、図鑑を前にして座っていたのです。

「いいや、冒険をしてきたんだよ。」

ケンがマヤに言いました。

「ほら、この図鑑の蝶を見てごらん。」

「あっ、エルムだ・・・。」



これで、この不思議なケンとマヤの冒険はおしまいです。